世界文学全集　21

トルストイ

戦争と平和

I

中村白葉 訳

河出書房

世界文学全集 21　トルストイ I

© 1973

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和35年4月22日　初版発行
昭和48年5月20日　42版発行

訳　　者　中村白葉
発行者　中島隆之
印刷者　多田　基
装　　幀　原　弘
印　　刷・多田印刷株式会社
製　　本・加藤製本株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目　次

戦争と平和　I

第一巻

第一編……六
第二編……一四六
第三編……二五八

第二巻

第一編……三八二
第二編……四五〇
各章の内容……五四三

戦争と平和 I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

主要人物

ボルコンスキイ公爵家（ロシヤ屈指の名門）

ニコライ老公爵　典型的貴族で、世をすねた偏屈者。

アンドレイ公爵（アンドレイ・ニコラーエヴィッチ）　老公爵の長男。冷徹な批判的頭脳を備えた青年貴族。

リーザ（小柄な公爵夫人、リーズとも呼ばれる）　アンドレイの妻。ニコールシカの母。お産で若死する。

マリヤ（公爵令嬢。マリヤ・ニコラーエヴナ）　アンドレイの妹。後にニコライ・ロストフの妻となる。

ニコールシカ（小公爵）　アンドレイと亡き妻リーザとのあいだに生まれた男の子。

ブリエンヌ　マリヤの侍女、陽気ではす葉なフランス娘。

ロストフ家

イリヤー老伯爵（イリヤー・アンドレーイチ）　中流の貴族。好人物。

ナターリヤ（伯爵夫人）　その夫にふさわしい妻であり、平凡な母親。

ニコライ（ニコライ・イリイチ）　その長男。青年将校。純朴な多血質の青年。後マリヤと結婚する。

ペーチャ（ピョートル・イリイチ）　その次男。後に見習士官となり、戦死する。

ヴェーラ　その長女。ニコライの姉。美しいが、どこかまのぬけたところのある娘。後にベルグの妻となる。

ナターシャ（ナターリヤ・イリーニチナ）　その次女。花のつぼみのように生気はつらつとした美しい少女。後にピエール・ベズーホフの妻となる。

ソーニャ（ソフィヤ・アンドレーエヴナ）　その姪。幼い時からロストフ家に養われた従順な美しい娘。

アンナ・パーヴロヴナ（シェーレル）　皇太后付女官。ペテルブルグ社交界における一方の重鎮。

アンナ・ドルベツカーヤ　落ちぶれているが、純然たる社交婦人。ロストフ家の親戚。
ボリース・ドルベツコーイ　その息子。世才にたけた抜け目のない青年。
ピエール・ベズーホフ（ピョートル・キリールロヴィッチ）富裕な貴族の庶子。世間知らずの空想家型。真理探究者。アンドレイ公爵の親友。妻エレンの死後、ナターシャと結婚する。
エレン（エレーナ・ワシーリエヴナ）その妻。ワシーリイ公爵の令嬢。初めピエールと結婚する。絶世の美人ではあるが、無知で、破廉恥な淫蕩女。
ワシーリイ公爵（クラーギン）その父。時の権勢家で官界の游泳に長じた古だぬき。
イッポリート（イッポリート・ワシーリイチ）その長男。外交官。暗愚な男。
アナトーリ（アナトーリ・ワシーリイチ）その次男。美貌のあばれ者。無恥無良心の不良青年。
ドーロホフ　その友人の青年将校。有名なあばれ者。
ベルグ　頭の単純な軍人。しかし世渡りはうまい。後にヴェーラ・ロストフの夫となる。
ジューリイ・カラーギナ　富裕な貴族のあととり娘。マリヤの親友。後ボリースの妻となる。
デェニーソフ（ワシーリイ・ドミートリイチ）軽騎兵大尉。ニコライ・ロストフの最初の中隊長。軍人気質の人情にあつい好人物。
ビリビン　外交家。アンドレイ公爵の親友。
トゥーシン大尉　一見地味で無器用な沈痛型の男。
ラストープチン伯爵　モスクワ総督。
クトゥーゾフ将軍（ミハイル・イラリオーノヴィッチ）ロシヤ軍の総指揮官。真の国民的英雄。
プラトン・カラターエフ　ピエールの俘虜当時に仲間となった一兵卒。ロシヤ農民の素朴な人生観の体現者。
バズジェーエフ（オーシップ・アレクセーエヴィッチ）宗教家。フリーメーソン（共済組合）の指導者。
マーリヤ・ドミートリエヴナ（アフロシーモワ）ロストフ家に親しい社交界の婦人。

第一卷

第一編

一

「〈さあ、いかがでございます、公爵、ゼノアもルッカも（いずれもイタリアの地名）ボナパルト家の領地同然になってしまったじゃありませんか。いいえ、わたくしは今からお断わりしておきますけれど、もしあなたがわたくしに、戦争なんかないとおっしゃったり、なおその上にあの反キリストの――そうですとも、わたくしあれはアンチクリストだと信じておりますのよ――醜悪さや恐ろしさを弁護なすったりなさるようだと――わたくしもう、あなたなんか存じませんからね、あなたはもうわたくしの親友でもなければ、ご自分でおっしゃるようにわたくしの忠実な奴隷でもございませんことよ〉それはそうと、きょうはようこそ、ごきげんよろしゅう。〈わたくしはどうやらあなたをお驚かせしたようでございますわね〉さ、どうぞお掛けあそばして、お話しくださいまし」

一八〇五年七月、皇太后マリヤ・フョードロヴナ側近の女官として有名なアンナ・パーヴロヴナ・シェーレルは、彼女の夜会へ第一番に乗りつけてきた、ときの顕官ワシーリイ公爵を出迎えながら、こう言った。アンナ・パーヴロヴナはこの二、三日咳がでて、彼女の言葉によると、インフルエンザにかかっていた。（インフルエンザというのは当時まだ少数の人にしか用いられない新語であった）けさ、金ぴか服の侍僕の手で諸方へ届けられた手紙には、例外なく、一様にこう書かれてあった――

「『伯爵――あるいは公爵――御許さまにしてもしほかによきお目あてもあらせられず、また哀れなる病婦のもとにて一夜を送りたもう予想もさしてご不快におぼしめさず、今夕七時より十時のあいだ、小宅にて御許さまを見参らすをえば幸甚に存じます』」

「〈おお、なんという手きびしい攻撃でしょう！〉」と、こうした出迎えにもいささか混乱の色もなく、刺繍のある宮廷服に長くつ下、それに短ぐつといういでたちで、胸にかずかずの勲章を飾り、平べったい顔に明るい表情をたたえてはいってきた公爵は、こう応酬した。

彼は、われらの祖父たちが話したばかりでなく考えるにさえ用いたという、あの洗練されたフランス語で、しかも社交界や宮中で年をとった高位高官に特有の、もの静かな、庇護するような調子で、話したのである。彼はアンナ・パーヴロヴナのそば近く歩みより、香水のぷんぷんする光ったはげ頭を彼女の前につきだして、手に接

吻すると、悠然と長いすに腰をおろした。

「〈まず第一に伺います、ご健康はいかがですか？〉どうぞわたくしに安心させてください」と彼は、声は変えないで言ったが、その調子には、礼儀と同情のかげから、無関心と嘲笑までが顔をのぞけていた。

「どうして健康でなどいられましょう……精神的の苦しみが絶えないという時に？　いったい今の世の中に、だれが平気でいられますでしょうね、感情というもののある人間で？」こうアンナ・パーヴロヴナはいった。「あなたは、今晩はたぶん、ずっとわたくしどもにおいでくださいますでしょうね？」

「では、イギリス公使の祝宴はどうなります？　きょうは水曜日ですよ。わたくしはそちらへも顔をださなくちゃなりませんからな」と公爵は言った。「娘がこちらへお寄りして、わたくしを連れて行くことになっているのですよ」

「わたくし、きょうのお祝いはとりやめとばかり存じていましたの。〈正直のところ、ああしたお祭り騒ぎや花火などが、すっかりいやになったのでございますよ〉」

「あなたのそういうお望みがわかっていたら、お祝いはとりやめになったでしょうが」と公爵は、くせで、ねじをまかれた時計のように、自分でも信じてもらいたくないことを口にしながら、言った。

「〈まあ、そうわたくしをいじめないでください まし。それはそうと、ノヴォシーリツェフの急報事件はどうなりましたの？　あなたはすっかりご存じでいらっしゃいましょう〉」

「さあ、なんと申しあげたらいいですかね？」と公爵は、冷やかな退屈らしい調子で言った。「〈どうなったかとおっしゃるんですね？　ボナパルトは自分の舟を焼いてしまったから、われわれもどうやら自分の舟を焼く覚悟でいる、こんなふうにきまったらしいですよ〉」

ワシーリイ公爵は、役者が古い脚本のせりふでも言うように、いつもなまけた口のききかたをした。反対に、アンナ・パーヴロヴナ・シェーレルは、四十という年にも似合わず、活気と衝動性とにみちみちていた。

熱狂家であること、これが彼女の一般的役どころになってしまっていたので、ときには自身それを望まない場合にも、彼女は、自分を知る人たちの期待を裏切らないように、熱狂をよそおうようなこともあった。アンナ・パーヴロヴナの顔にたえずおどっているひかえめな微笑は、盛りをすぎたその顔には不似合いだったが、ちょうど甘やかされた子供にあるように、つねに自分の愛すべき欠点——彼女自身はそれをあらためたいとも思わなければ、できもせず、また必要とも思っていないその欠点の自覚を現わしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

政治活動の話の最中に、アンナ・パーヴロヴナは急に熱してきた。

「ああ、もうオーストリアのことはおっしゃらないでくださいまし！　わたくし何もわからないのかもしれませんけれど、オーストリアはいつにも戦争を望んだことはありませんし、今も望んではおりませんわ。あれはわたくしどもを売ったのでございます。ただロシヤだけはヨーロッパの救い主でなければなりません。うちの陛下はご自分の高い使命をご存じで、それに忠実でいらっしゃいます。これこそ、わたくしの信じているただ一つのことでございますわ。世にも珍しく善良でいらせられますわが陛下の御前には、世界でいちばん偉大な役目が立っております。それに、陛下はいかにもおりっぱな、お徳の高い方でいらっしゃいますから、神さまも陛下をお見捨てになるはずはありませんし、陛下はきっとご自分の使命――今ではあの殺人者で悪党の形で現われているため、いっそう恐ろしく思われる革命のヒードラ（怪蛇）を退治する使命を、りっぱにお果たしあそばすにちがいございません。わたくしどもだけはどうでも正しい者の血を贖わなければなりません……いったいわたくしどもは、だれに望みをかけたらよろしいのでしょう？　伺いたいものでございますわね……イギリスなぞ、その商人根性ではとても、アレクサンドル皇帝のお心の高さを理解するはずはありませんし、また理解できるはずもございませんわ。イギリスはマルタ島の撤兵を拒絶しました。わが行動の下心をさぐろうとして鵜の目鷹の目になっているのでございます。だいいち彼らは、ノヴォシーリツェフに何を申しましたでしょう？……なんにもですわ。彼らは、ご自分のためには何ひとつお望みあそばさず、ただ世界の福祉だけをお念じあそばすわが陛下の献身的な精神を理解しませんでしたし、また今でも理解できないのでございますよ。それに、彼らは何を約束いたしましたでしょう？　なんにもですわ。また、約束したにしたところで、なんにもなりはいたしません！　だいいち、プロシャはもう宣言しました。ボナパルトには勝てないって、全ヨーロッパが束になってかかっても彼にはなんにもできないって……ところがわたくしは、ハルデンベルクやガウグヴィッツ（いずれもプロシャの政治家）の言葉なんか、一言も信じはいたしませんよ。〈あの評判だおれのプロシャの中立なんか、――ただの陥穽にすぎませんわ〉わたくしの信じておりますのはただ神さまと、親愛なる陛下の高いご運命だけでございます。陛下はきっとヨーロッパをお救いくださいますわ……」

彼女はふいに、われとわが熱中をあざけるような微笑をうかべて、言葉をきった。

「わたくしは考えるのですが」と公爵は笑みを含みなが

ら言った。「もしあなたをあの憂すべきウィンツェンゲローデ（ロシヤの将軍で、ウェストファリアの男爵）のかわりに派遣したら、あなたはきっとプロシャ王の盟約を強奪してこられたでしょうよ。あなたはじつに雄弁でいらっしゃるから。それはそうと、お茶を一ぱいくださいませんか？」

「ただいま。〈それはそうとね〉」と彼女はまたおちついてきて、言いたした。「今夜はわたくしどもへたいへんおもしろいお方がお二人お見えになりますのよ。〈一人はモルテマール子爵という、ロハン家を通じてモンモランシイ家の親戚にあたる方で〉フランスでも名家の方でございます。亡命者中でもりっぱな方で、真の亡命者のひとりですの。それからいま一人は〈モリオ僧正〉――あなたもあの大知識はご存じでいらっしゃいますわね？あの方は陛下にも拝謁を許されましたんでございますよ。ご存じでいらっしゃいましょう？」

「ああ！　それはじつに愉快ですな」と公爵は言った。「ときに、ひとつ伺いますが」彼はたったいま何かを思いだしたという様子で、わざとむとんちゃくらしく言いたしたが、そのじつこれからたずねようとしていることこそ、彼の訪問のおもな目的だったのである。「あれはほんとうのことでしょうかね、〈皇太后〉がフンケ男爵のウィン一等書記官任命をお望みになってるというのは？〈あれは、いっこう無能な男らしいですがね、あの男爵は〉」

ワシーリイ公爵は、いま人々がマリヤ・フョードロヴナ皇太后を通じてフンケ男爵のために奔走しているその地位に、わが子をすえたいと願っていたのである。

アンナ・パーヴロヴナはそこで、彼女にしろほかのだれにしろ、皇太后陛下のおぼしめしに何がかなうか――それをとやかくいうことは許されないというしるしに、両の目をほとんど閉じてしまった。

「〈なにしろあのフンケ男爵は、姉宮殿下から国母陛下にご推薦あそばされた方でございますからねえ〉」彼女は憂うつらしい、すげない調子でこういっただけであった。

アンナ・パーヴロヴナが皇太后陛下の名をいった時、その顔は急に、深い、心からの心服と尊敬の表情を現わしたが、それには、彼女が話のなかで自分の高貴な保護者のことを口にする時きまって見せる憂愁の色が含まれていた。彼女は皇太后陛下がフンケ男爵に〈多くの尊敬〉をお払いあそばされたと語ったが、するとまたそのまなざしは憂愁の色におおわれた。

公爵は無関心な様子でだまってしまった。アンナ・パーヴロヴナは、彼女独特の女らしい、宮廷式の巧妙さと敏捷さを持った手練で、皇太后陛下に推挙された人物にたいしてああいう批判をあえてした公爵を軽くたしなめも

し、同時になぐさめてもやりたいと思いだしたのである。

「〈ときに、あなたのご家庭のことでございますがね〉」と彼女は言いだした。「お宅のお嬢さまは社交界へお乗りだしになってからというもの〈全社交界の喜びになっておしまいでございますよ。太陽のようにお美しいなんて〉」

公爵は尊重と感謝のしるしに頭をさげた。

「わたくしよく考えるんでございますが」とアンナ・パーヴロヴナは、瞬間的沈黙ののち公爵のほうへいすをよせ、優しくほほえみかけながら、それによって政治的・社交的の話は切りあげ、これからは親身なうちあけ話をはじめましょうとでもいうような調子を見せて、言葉をつづけた。「わたくしよく考えるんでございますけれど、人生の幸福というものは、ときによるとずいぶん不公平にわかたれるものでございますのね。いったいどうして運命は、あなたにはあんなにりっぱなお子さんを二人も授けたんでございましょう、——もっともご次男のアナトーリはべつですよ、わたくしあのお子は好きません。(と彼女は眉をあげて、断固たる調子で言葉をはさんだ)ほんとになんというりっぱなお子たちでしょう? それをあなたは、あのひとたちをちっとも認めてらっしゃらないんですもの、あなたはあのひとたちの親ごさんとは申せませんわ」

そして彼女は、持ちまえの歓喜にみちたような微笑でにっこり笑った。

「〈では、どうしろとおっしゃるんです? ラファテル(ヨアン・カスパル。スイスの文学者・伝道者。マリヤ皇太后の崇拝を得た。)ならさっそく、自分には親の愛なんていう摺はない、こんなふうにでも言ったでしょうな〉」と公爵は言った。

「じょうだんはおよしあそばせ。わたくしまじめにお話したいと思っているんでございますから。よろしゅうございますか、わたくしはあなたのご次男には不満なんでございますよ。これはここだけの話でございますがね。(彼女の顔は憂うつな表情をおびてきた)あのお子のことは皇太后さまのお耳にもはいっていますので、みんなあなたをお気の毒に思っておいでございますよ……」

公爵は答えなかったが、彼女はだまって、意味ありげに彼の顔を見ながら、返事を待っていた。ワシーリイ公爵は眉をひそめた。

「いったいあなたはわたくしにどうしろとおっしゃるんですか!」とついに彼は言いだした。「わたくしがあれたちの教育のために、父としてできるだけのことをしたのはご存じでしょう、ところが二人とも〈ばか者〉にできてしまったのです。イッポリートのほうはまだしもおとなしいばか者ですが、アナトーリときたら、手におえぬばか者ですからね。ちがいといえばそれだけで」こう、

日ごろよりいっそう不自然に活気づいた微笑をうかべながら、同時に、その口辺にたたまれたしわのなかに、ないやら思いがけなく粗野で不愉快な感じをかくべつはっきりと現わしながら、言った。

「ほんとにまあどうして、あなたのような方にお子さんが授かるのでしょうねえ？　これであなたが父親でさえいらっしゃらなかったら、わたくしにしたって、何ひとつあなたを非難することはできなかったでしょうに」とアンナ・パーヴロヴナは、もの思わしげに目を上げながら言った。

「〈わたくしはあなたの〉忠実な奴隷です。〈あなただけにはうちあけたお話ができますが〉わたくしの子供たちは――〈わたくしの生存の重荷です〉わたくしの十字架です。わたくしはこう自分に説明しているのですよ。……〈いったいどうしたらいいのです？……〉」

彼は、身のこなしで、残酷な運命にたいする自分の恭順を示しながら、ちょっと沈黙した。アンナ・パーヴロヴナは考え込んでしまった。

「あなたはなんでしょう、まだ一度も、あの放蕩者のアナトーリに、嫁を持たせることをお考えになったことはないでしょう。ふつう世間では」と彼女は言った。「老嬢は〈人を結婚させたがるものだ〉と申します。わたくしはまだこの弱点をわが身に感じてはおりませんけれど、ちょうどわたくしの知り合いに〈かわいい娘さん〉が一人ありましてね。父親と二人でたいへん不幸な日を送ってるんでございますよ。〈わたくしどもの親戚にあたる公爵令嬢〉ボルコンスカヤなんでございますがね」

ワシーリイ公爵は、返事こそしなかったが、社交界の人に特有の想像と記憶の敏捷さにより、自分がこの報告を考慮に入れたということを、軽い頭の動かしかたで示すのであった。

「いや、あなたはご存じないことですが、あのアナトーリには年に四万ルーブリからかかりますのでね」と彼は、どうやら自分の思考のみじめな流れをせきとめかねる様子で言った。彼はちょっとだまった。「もしこのままで進んだら、五年もするうちにはどうなるでしょう？〈これが親になるということの利益なんです〉ところで、その人はお金持ちですか、お話の公爵令嬢は？」

「おとうさまはひじょうなお金持ちで、同時にしまりやでございます。今は田舎に住んでおりますの。ご存じでいらっしゃいましょう、あの有名なボルコンスキイ公爵、まだ先帝の時代に退職して、プロシャ王などと綽名された人でございますよ。たいへん賢い人ですけれど、いろいろ奇妙な癖のある重苦しい人なんでございます。〈それで、かわいそうな娘は石のように不幸なんですわ〉この娘の兄というのが、ほら、ついさきごろリーザ・マ

イネンと結婚した、あのクトゥーゾフ将軍の副官でございますよ。この人も今晩宅へまいるはずでございます」

「〈ねえ、親愛なるアンネット〉」と公爵は、ふいに相手の手をとって、なぜかそれを下のほうへ少しまげながら、言った。「〈どうかこの話をまとめてください。そしたらわたくしは、永久にあなたの〉こよなく忠実なラープ（奴隷）になります。〈もっとも、わたくしの領地の百姓頭が報告を書く時にはいつでもラープですがね〉その娘さんなら、家柄はいいしお金持ちだし。わたくしに必要なものはぜんぶそろっていますからね」

そして彼は、彼の特色である例の自由な、なれなれしい、優美な動作で女官の手をとり、それに接吻し、接吻し終わると、楽々とひじ掛けいすに身をのばして、あらぬかたを見やりながら、女官の手を軽く振るのだった。

「〈まあ待っていらっしゃい〉」アンナ・パーヴロヴナは考えながらこう言った。「さっそく今晩、リーザ・ボルコンスカヤ若夫人に話してみましょう。ひょっとしたらうまくゆくかもしれません。〈ひとつあなたのご家庭で老嬢の仕事のおけいこをはじめてみましょう〉」

二

アンナ・パーヴロヴナの客間はぼつぼつ人でつまってきた。ペテルブルグの最高社会、年齢や性格では千差万別だが、住む社会では一様な人々がしだいに乗り込んできたのである。ワシーリイ公爵の娘で美人のエレンも、父を迎えてイギリス公使の祝宴へ同行するために馬車を寄せた。彼女はシーフル（皇后の頭文字を組み合わせた飾記章）をつけ、舞踏服をまとっていた。また、〈ペテルブルグ第一の魅力ある婦人〉として有名な、若い、小柄な公爵夫人ボルコンスカヤも来た、これは去年の冬結婚したばかりだが、もう妊娠中だったので、今は大がかりな社交界へは出ず、軽い夜会くらいにだけ顔をだしていたのである。やがてワシーリイ公爵の長男イッポリート公爵が、モルテマールと連れだって来て、それを一同に紹介したし、つづいてモリオ僧正も、その他多くの人々も乗りつけてきた。

「あなたがたはまだ Ma tante（わたくしの伯母）にお会いになりませんわね、お知り合いでございませんわね？」アンナ・パーヴロヴナははいってくる客たちにこういっては、えらくとりすました様子で、客が集まりかけるやいなや次の間からよちよちと出て来た、大きな蝶形リボンをかけた小柄な老婦人のほうへ連れて行き、客の顔から Ma tante へとゆるゆる目を移しながら、いちいち彼らの名を告げて、それからわきのほうへ行くのだった。

客人たちはみな、だれにも知られていなければだれにも興味も必要もないこの伯母さんに、あいさつの儀礼をつくすのだった。アンナ・パーヴロヴナは悲しげな、と

りすました関心をもって、無言で彼らに賛意を表しながら、その応対を見まもっていた。Ma tante はそのひとりひとりに、まったく同じ表現で、相手の健康や自分の健康のこと、さてはありがたいことに近ごろよくなられた皇太后陛下の健康について話す。ここへくるほどの者はみな、礼儀上急ぐようなそぶりは見せなかったけれど、でも重苦しい義務を果たした安易な気分をいだいて、老婆の前をはなれて行くのだった。夜会のあいだもう二度と彼女のそばへ近よらないために。

若い公爵夫人ボルコンスカヤは、金糸で刺繍したびろうどの袋に編み物を入れてやって来た。彼女のかわいらしい、薄いひげのせいで心もちくろずんで見える上くちびるは、歯にくらべて少し短めだったが、それが開きかげんになっているところも愛らしかったし、どうかしてのびぎみになり、下くちびるまでさがったりすることがあると、それがまたいちだんと愛らしく見えるのであった。これは、非常に魅力ある女性にはよくあることだが、彼女のこの欠点――上くちびるが短く、口が半ば開いていること――が、かえって彼女の特色、いわば彼女の美点に思われるのだった。人はみな、この、自身の妊娠状態にやすやすとたえている健康と活気にみちた美しい未来の母を目にすると、心が明るくなった。彼女を見ていた老人たちや、退屈して暗い顔をしている若い人たちにも、しばらく彼女といっしょにいて話していると、自分たちが彼女に似てくるような気がするのだった。彼女と言葉をまじえ、その言葉につれて彼女の明るい笑顔や、のべつちらちらと現われるかがやく白い歯を見たものは、自分がとりわけその日は愛想のいい人間になったように考えた。ひとりひとりがみなそう考えるのであった。

小柄な公爵夫人は、からだをゆするようにしながら、小きざみな早い足どりで、仕事の袋を片手にさげたままテーブルの周囲をひとまわりし、楽しそうに衣装を直しながら、銀のサモワールのそばの長いすに腰をおろした。その様子はまるで、自分は何をしようと、それはみな、彼女にとっても周囲の人々にとっても、〈楽しみの一部〉になるだろうといった調子だった。

「〈あたくし、お仕事を持ってまいりましたのよ〉」彼女は自分の手さげ袋をひろげながら、一同に向かってこういった。

「まあいやですわ、アンネット、〈あたくしにわるい冗談なんかなさらないでちょうだいな〉」と彼女は女主人に話しかけた。「〈ほんとにちょっとした夜会だなんて書いておよこしになったでしょう。ですからごらんあそばせ、あたくしのこの身なりを〉」

こういって、胸のすこし下のあたりをひろいリボンで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb